

# 国立北京女子師範学院について

——日本占領下北京における女子教育——

杉本史子

## 【はじめに】

一九七三年七月、日本は華北を占領し、当時北平と呼ばれていた北京（以下、北京とする）を支配下に置いた。だが国際的に批判を浴びた「満洲国」での轍を踏まぬよう、この地に「中華民国臨時政府」（以下、臨時政府と省略）を設置して、現地の中国人による統治であることを強調し、あくまでも日本の植民地ではないという体裁を保った。しかし実際にはこの時期、傀儡政権の自律性は弱められ、日本の国内機関が直接占領地支配に乗り出していた。

北京が占領されると、多くの教育機関は戦時首都であった重慶を中心とする国民党支配地区へと移転した。中国では主に、この移転先で学校関係者が直面した困難や、抗日活動の奮闘の記録を、正統な学校史として位置づけている。④だが実際には様々な事情で移転がかなわず、北京に留まり、日本の勢力下にあった学校でやむなく教育を受けたり、教鞭を執ったりした教育関係者も少なくない。⑤こうした日本占領下で展開された学校教育は、中国の研究では主に日本による奴隸化教育であると位置づけられ、支配的な教育の下で、苦悩、抵抗する教師、学生像が描かれてきた。⑥日本においても占領下北京の教育研究は多くの蓄積があり、教育を進める上で、日本国内の諸機関が現地の教育に参画したこと、当初行政を握っていた北支那方面軍と日本政府が設置した興亜院との間に確

執が起こっていたことなども明らかにされている。⑦また近年、占領下の少数民族教育や女子教育にも目が向けられるようになった。⑧ただこうした多くの研究の積み重ねはあるものの、個々の学校における教育の実態を明らかにする作業はまだ十分であるとは言えない。

そこで本稿では、臨時政府の下で教育部直轄の高等教育機関として教育ピラミッドの頂点に位置づけられた三校のうちの二校、国立北京女子師範学院に注目することにする。同校は当時北京における女子の最高学府とされながらも、わずか三年半余りで閉校となったこともあり、現在ではほぼその存在を知られていない。そこで意図されていた女子教育とはどのようなものであったのか。それは占領以前の教育とはどういった点で異なり、またどういった点で継続があったのか。臨時政府及び日本側は女子学生に何を期待し、また女子学生はそれをどう受け止めたのか。本稿では特にジェンダーの視点を明らかにするため、当時女子特有の教育と考えられていた家政科教育に注目しながら、以上の点を検証していきたい。

## 【第一章 国立北京女子師範学院の概要】

一九三八年、臨時政府は日本の占領で混乱に陥った教育機関を「回復」するという名目で、高等教育機関の再編に取りかかった。従来の公立教

育機関は、臨時政府にとって不都合な存在であると見なされ、一律に改組の対象となり、北京の公立高等教育機関は、三校（国立北京大学、国立北京師範学院、国立北京女子師範学院）に再編された。<sup>⑩</sup>臨時政府は師範教育に男女別学の方針を取り入れたことから、師範学院は男女共学校にはならず、女子のみ的高等教育機関として国立北京女子師範学院が用意された。同校は従来の北平大学女子文理学院<sup>⑪</sup>（以下、女子文理学院と省略）を受け継ぐ形で、急ピッチで準備が進められ、一九三八年三月に新入生が集められ、四月に開学式が執り行われた。<sup>⑫</sup>校舎にはもと国立北京大学法商院の学舎が使われた。同年八月には、代理院長であった教育部次長の黎世衡に代わり、九州帝国大学工学部で応用化学を修めた張愷<sup>⑬</sup>が院長に任命された。<sup>⑭</sup>

同校は中等教育機関の女性教員を養成するために作られた学校で、高級中学を卒業するか、それと同等の学力を持つ者を入学対象者としていた。<sup>⑮</sup>学科には四年制の文科、理科、家政科があり、さらに三年制の体育専修科と音楽専修科を設けていた。一九三九年に改定された組織大綱にはこう書かれている。

第一条 本学院は東亜集団の精神及び中国伝統の美德に依り、中等学校の女子教員の資格を持つ人材を育成することを目的とする

第二条 本学院は中華民國臨時政府の教育方針に従って、実践的訓練を重視する<sup>⑯</sup>

第一条の「東亜集団の精神」が、後の大東亜共栄圏構想につながる東亜新秩序のことを指しているのは明らかであろう。一方「中国伝統の美德」という言葉も使われ、日本の統治ではないことを内外に示そうとしている。占領下の華北では、国民政府の提唱した三民主義や共産党の掲げるマルクス主義に対抗するために、中国の伝統文化が強調される傾向にあった。<sup>⑰</sup>

第二条には、臨時政府の意向に沿った教育をおこなうことがはっきりと示されている。続けて述べられた「実践的訓練を重視する」という方針は、「満洲国」の教育方針にも類似した言葉があり、日本占領下で共通して強調された教育方針の一つであった。知識一辺倒になることなく、すぐに実地で使える技能が重んじられていたことを指すが、実態としては理論面を重視した教学を封じること、反日活動などを抑え込む狙いがあったと思われる。<sup>⑱</sup>

日本占領下の教育であることが端的に分かるのは、そのカリキュラムである。文科の日文系（日本語専攻）はもちろんのこと、どの学科においても日本語の授業は必修とされ、週に平均して三、四時間は設けられていた。またすべての学科において「東亜史論」という科目を学ぶことが義務付けられていた。これは「学生に東亜の文化交流と相互に関わる歴史を知らしめ、（中略）中日提携と東亜の平和に裨益させること」を目的とした科目であり、日本の皇国史観に則った東アジア史を教えていたことが推測される。さらに同校の文科には最終学年に「日本文化概論」という科目が設けられていた。<sup>⑲</sup>

では次に学校の校風を見ていきたい。一九四〇年に北京の華北文化書局から出版された『婦女雜誌』<sup>⑳</sup>には、しばしば女学校訪問記が載せられているが、早くも二期目に「国立北京女子師範學院訪問記」（以下、「訪問記」と省略）が登場している。<sup>㉑</sup>「訪問記」には、まず同校が北京における女子専門教育の最高機関であると紹介され、規律が整っていること、設備が充実していること、実践が重んじられていることが順を追って述べられている。学科として特に取り上げられているのが、家政科、体育専修科、音楽専修科である。家政科については次章で詳述するが、同校では健康な国民の育成という観点から、体育教育にも力が入れられていた。「訪問記」には、毎朝、院長のかけ声の下、すべての学生が早朝の体操に

参加しなければならなかったことが記されている。また華北の状況を日本向けに紹介したグラフ誌の『北支』でも、同校の体育専修科の学生たちが一齐に体操する写真などが載せられている。そこには槍投げ、体操、棒高跳びなどをする女子学生たちの写真が五枚掲載され、「木馬、跳箱、肋木のある圓周二百米の運動場に白シャツに黒パンツの女生徒の投げける槍は青空を截つて跳躍する逞しい脚はアカシアの緑に映えてゐた」という説明書きが付されている。ここからは、規律を守らせ、身体を鍛えることが特に重視されており、対外的にも規律正しく澆漓とした女性像をアピールしようとしていたことが見て取れる。なお、家政と体育は少数民族に対する教育の中でも特に重んじられており、占領下で共通して進められた女子教育の方針であったようだ。

学生たちについてはこう描かれている。

現在、学生はすでに四、五百人に達し、多くは、二十歳前後の健康で美しい女性たちである。服装は学校が定めた制服で、すべての学生がそれを一律に守っている。清楚であり少しも派手で浮ついたところがなく、高尚で勤勉な精神をよく表している。<sup>27</sup>

では定められた服装とはどのようなものであったのだろうか。戦時の華北の写真が多数収録されている「華北交通アーカイブ」には、一九三九年四月に撮影されたとされる同校の写真が何枚か収められている。校内を写したと見られる写真には、伝統服をアレンジした旗袍式のワンピースの上に、そろいの上着を着て歩く女子学生の姿が見られることから、中国式の制服が取り入れられていることが分かる。ただ上海で流行した旗袍のように体のラインを強調したのではなく、少しゆったりとした服装である。写真からはモダンで瀟洒な雰囲気は感じられず、「清楚」というよりは少し古めかしい印象さえ受ける。

実際、これが上から抑えつけられただけの見せかけの「清楚」さや「規

国立北京女子師範学院について

律」であった可能性もある。『婦女雜誌』の別の記事には、「院長の張愷氏はしばしば学生が奇抜な服を着たり、パーマを当てたり、ハイヒールを履いたりすることを禁じ、また男友達が寄宿舎に來たりすることなどを制限していた。」<sup>28</sup>とある。また日本占領下で出された新聞『新民報』には、張愷が学生の管理に頭を悩ませ、四〇年に「入学規定」を改定し、門限や服装、訪問者の面会時間などを細かく定め直したことが書かれている。<sup>29</sup>以上からは、モダンな装いや男女の交際を厳しい管理によって封じ込めていた、自由のない校風が浮かび上がる。

では、どのような学生たちが学んでいたのだろうか。同校は開校当所、新たに募集した新入生だけでなく、学校再編前に存在していた三つの公立校の学生たちを受け入れていた。一つは女子文理学院の学生であり、二つ目は一九三一年に男女共学校となっていた国立北平師範大学の女子学生、三つ目は河北省立女子師範学院の学生であった。結果として初年度には新たに募集された二七二人の新学生、女子文理学院から來た二九人の学生、河北省立女子師範学院から來た二七人の学生が、それぞれ入学手続きを取り、さらにこれに国立北平師範大学の女子学生が加わった。<sup>30</sup>この構成からは、臨時政府が高等教育機関を再編したことで、行き場を失った女子学生たちが、同校に入らざるを得なくなった経緯が読み取れる。

では彼女たちは果たして華北のトップレベルの女子学生であったのだろうか。当時、日本の支配下に置かれることを望まず、移転するだけの資金や国民政府とつながりを持っていたエリート家族は、すでに重慶や西北地区など、国民政府の勢力圏内へと移転を始めていた。<sup>31</sup>まだ北京に残る学生も、日本による露骨な教育介入を嫌がり、優秀な学生や要人の子女たちは、独自の教育を続けていたミッション系の私立学校に入ろうとする傾向があったという。<sup>32</sup>だが多くの家庭にとって、費用のかかる私

立学校に子女を通わせるのは、容易なことではなかった。その一方で、国立北京女子師範学院には公費の補助があり、家計が苦しく、子供を就学させる費用を負担できない家庭は、毎年一二〇元の公費を申請することができた。<sup>④</sup>この他「平均の成績点数が八五点以上で、クラスの中で試験の成績がトップであり、身体が健康であって、品行が正しい者」は、さらに奨学金も受けることができた。<sup>⑤</sup>以上からは、家計や家の事情で移転したり私立学校に通ったりすることはできないが、苦しい生活の中でも教員を目指そうとする志のある女子学生が同校に集まっていたと推測できる。<sup>⑥</sup>

以上見てきたような特徴を持つ国立北京女子師範学院だったが、学校が存在したのはわずかな期間に過ぎなかった。一九四一年十一月、同校は国立北京師範学院に統合される形で閉校となった。<sup>⑦</sup>当時、学校の統廃合をめぐる識者の見解が『婦女雑誌』に八頁にわたって大きく掲載された。<sup>⑧</sup>この記事によると、事変前には中等教育機関の教員を養成する学校として、国立北平師範大学があるのみであり、カリキュラムも重なるのでわざわざ女性だけの学校を作るのは国費の無駄であると考えられていた。しかし日本の男女別学教育が成績を上げていたことに鑑み、敢えて女子だけの高等教育機関が作られたと記されている。ここから考えても、このたびの統合は男女平等教育という観点からの男女共学化ではなく、単なる教育予算削減のための統合であったことが予想できる。こうして国立北京女子師範学院はわずか三年半余りの歴史を閉じた。

## 【第二章 国立北京女子師範学院の家政科教育】

臨時政府が当初、男女共学校ではなく、日本の男女別学教育をモデルに、敢えて女子だけの高等教育機関を作ったことは先に述べた。本章で

は男女別学教育体系の中で、特に女子独自の科目として重視されていた家政科教育を見ていくことで、臨時政府の狙いを明らかにするとともに、国民政府下で行われていた女子教育との連続性も指摘したい。

国立北京女子師範学院は文科、理科、家政科の三科編成であったが、開校直前まで文科、理科の二科編成を想定しており、文科の中に家政経済を専門とする専攻を組み込む予定であったようだ。<sup>⑨</sup>ところが急遽、家政科を一つの科として独立させ、三科をメインとする編成へと拡大されることになった。詳しい経緯は明らかでないが、恐らくは女子特有の科目であった家政科を重視すべきだという何らかの圧力が加わった結果であると推測される。また設立当初、周辺地域の女子学生の受け皿となった同校が、河北省立女子師範学院の学生を大量に受け入れたことも、その要因の一つとして考えられる。後述するように、河北省立女子師範学院は特に家政科に力を注いだ学校として知られており、家政を専門に学ぶ学生も多数存在していた。

こうして急ごしらえで設置された家政科であったが、結果としては同校の看板学科として機能することになった。先述した「訪問記」にも真つ先に家政科関連の施設が紹介され、「女子に必要なものは、家事の研究、身体の鍛錬、音楽の才能の育成である」と一番初めに家事研究が挙げられている。<sup>⑩</sup>同校の家政科は家事系(専攻)と経済系に分かれていた。家事系の時間割には、調理や裁縫の他に栄養学、家庭看護法などが含まれ、編み物や刺繍、染織などの手芸科目も充実していた。ここからは家事の技術を実践的に学ぶための専攻であったことが分かる。一方、経済系の時間割には統計学や金融論、簿記、会計などが含まれ、いわゆる家計管理を中心としたハウスマネージメントを学ぶ場であったことが分かる。同校ではまた家政科の学生だけでなく、すべての学科の学生が一、二年時に週二回の家政学の科目を学ぶことが義務付けられていた。<sup>⑪</sup>

家政科関連の施設も充実していたと見られる。先述の「訪問記」には「模範家庭」と呼ばれた実習室の様子が描かれ、裁縫教室、調理室の設備も紹介されている。<sup>④</sup>「模範家庭」の狙いは、家庭を模した部屋で実習を行わせ、家事全般や中流階層以上で必要とされた礼儀作法を身に付けさせることにあった。『國立北京女子師範學院概覽』によると、同校の「模範家庭」は寝室一間、応接室二間の三部屋で構成されていた。寝室にはベッド、化粧台、洋服棚などが配置されており、応接室には、ソファ、長机、ピアノ、花瓶、本棚、ラジオなどが配置されていた。こうした設備を見る限りでは、ほぼ欧米の生活スタイルを模した部屋であったようだ。当時日本の植民地であった台湾の女学校における家政科の授業や和式の作法室とはずいぶん様子が異なっていたことが分かる。

他に家政科関連施設として、裁縫室と調理室があった。裁縫室には長い裁縫机が二台置かれ、ミシンも八台用意されていた。傍には学生が作った作品を展示できる部屋もあった。調理室には白い珞瑯引きのコンロがあり、内側にはオーブンが備え付けられていた。部屋の角には蒸し焼き窯、流しがあり、洗面台には水道が通っていた。室内には白い食器棚や冷蔵庫も置かれていた。調理の授業は中華、洋食の二種類に分かれていたため、調理器具や食器も中華、洋食の二種類のもので一通り揃えられていた。<sup>⑤</sup>これらはいずれも中国の中上流家庭もしくは欧米の近代家庭を想定したもので、「模範家庭」と同様、積極的に日本を感じさせる要素は見当たらない。

では同校の家政科はどこをモデルとしてきたものであるのか。以下に中国における家政科教育の変遷を振り返りながら確認していきたい。清末から民国初期にかけて、中国では日本の教育がモデルとして取り入れられたことはよく知られている。それは女子教育も同じであり、一九一〇年代半ばまでは、日本から取り入れた良妻賢母を育てるとい

教育が主流であった。他方、中国では近代女子教育の成立当初から、女性に家庭内での役割を求めただけでなく、直接社会と関わるものが強く期待されていたことも指摘されている。<sup>⑥</sup>このような中で、日本モデルの良妻賢母教育は、五四新文化運動期になると急速に批判の対象となり、学校によっては良妻賢母と結びつけられた家政科を必修科目から選択科目へと格下げする動きも見られた。<sup>⑦</sup>だが国民政府が一九二九年に「女子教育は健全な徳性の陶冶、母性の特質の保持、ならびに良好な家庭生活及び社会生活の建設を重視しなければならない」という方針を掲げ、いわゆる「母性教育」を始めると、科学重視の声と相まって、家政科を重視する声は再び強まっていく。こうして三〇年代後半には、高等教育機関における「家政科教育の黄金期」が到来した。<sup>⑧</sup>だがこの時期にはすでに教育制度そのものがアメリカモデルへと移行しており、家政科教育ももはや日本をモデルとしたものではなく、アメリカ家政学を取り入れたものへと変貌していた。

中華民国期に家政の専門学科を設けた高等教育機関は合わせて十四校あったが、これらの学科が設置されたのは、ほとんどが「母性教育」が掲げられた二〇年代末から三〇年代にかけてのことであり、四〇年代に入ってからなお新たに四校に家政学科が新設されている。<sup>⑨</sup>日中戦争期の国民党支配地区においても、家政科重視の傾向は続いており、むしろその必要性はより強まっていったと考えられる。

では、ここで家政科を特に重視した高等教育機関として知られる天津の河北省立女子師範学院に注目したい。この学校はもともと家政の専門学校を作りたいと考えていた教育家、斉国樑によって創設された。初代院長である斉国樑は、辛亥革命の時期をさみ二度、広島高等師範学校に留学している。その際、日本の女性が家庭で大きな役割を担っているのを目にし、帰国後に東京女子高等師範学校を卒業した教員を招聘して、

女子の家事実用教育に力を入れた。<sup>53</sup>一九二一年、斉はさらにアメリカに留学し、そこでも家政科教育の重要性を再認識する。<sup>54</sup>帰国後、彼は「女子家政芸術学院」の創設を行政に申請し続け、一九二九年、ようやく北伐後に成立した省政府によって、河北省立女子師範学院の中に家政学科を設けるといふ形で許可が下りた。<sup>55</sup>斉はアメリカで家政学を学んだ教員たちを招聘し、院内に中華と洋食の両方が作れる大きな調理室を設置するなどして施設の拡充や実践教育に力を注いだ。こうして同校の家政科教育は広く世に知られるようになった。だが一九三七年、同校は日本軍の天津攻撃により焼失してしまう。斉は学生とともに西安に避難し、西安臨時大学の中に家政学科を組み込み、そこで教育を続けた。<sup>56</sup>

だが一方で天津に残らざるを得なかった教員、学生も多数いた。国立北京女子師範学院が設立当初、河北省立女子師範学院からまとまった数の学生を受け入れていたことは先に述べた。両校はまた地理的に近いこともあり、教員間の異動もあった。例えば国立北京女子師範学院で文科教授と図書館主任を務めた戎春田は、河北省立女子師範学院で教鞭を執った経験があり、国立北京女子師範学院の家政科講師となった孫萃中は河北省立女子師範学院の卒業生であった。<sup>57</sup>また先述した国立北京女子師範学院の家政科関連施設は、斉が力を入れて作った施設と多くの点で類似している。以上の点から、国立北京女子師範学院の家政科は、河北省立女子師範学院の家政科教育から大きな影響を受けているのではないかと考えられる。

臨時政府の下で進められた国立北京女子師範学院での家政科重視の教育方針は、日本モデルの良妻賢母教育を復活させたかのように見えるが、実は国民政府の時期に進められた女子教育の流れと重なる部分もあった。河北省立女子師範学院の家政科はアメリカ家政学がモデルではあったが、家庭を整えることで国家に貢献させるという女子教育の方針は、

男女別学教育を推進しようとした臨時政府の方針とも合致しており、これが都合良く受け入れられたのではないかと思われる。

だがあくまでも中国の女子高等教育機関における教育目的は、直接社会活動に参加し、国家に貢献できる女性を育成することであった。河北省立女子師範学院の家政学科でも、学生には教育界で活躍し、都市や農村の地域発展に貢献することを強く求めていた。<sup>58</sup>他校の家政学科でも、その目的は「家庭の科学的な管理を学んだ専門家を育成し、社会に貢献することであつて、夫や子供中心の訓練をすることではない」とはつきり述べられている。<sup>59</sup>これは言い換えると、そう銘打たなければ、女性を家に押し戻そうとする保守的な教育であるとのレッテルが貼られてしまう恐れがあつたからでもある。<sup>60</sup>では果たして国立北京女子師範学院で行われた教育も、家庭の主婦ではなく、専門家の育成という点に重きが置かれていたのであるうか。次章では異なる史料を用いて検証していきたい。

### 【第三章 旅行記から見る日本の女子教育への眼差し】

これまで見てきたように、日本、中国ともに近代女子教育の中には、多かれ少なかれ良妻賢母を育成する狙いが含まれていた。だが双方がそれぞれ家庭の主婦の育成にどの程度の重きを置き、また社会における貢献をどの程度求めていたのかは、国ごとに分かれた資料からは判別しづらい。そこで本章と次章では比較の視点を導入するために、国立北京女子師範学院の学生自身が書いた日本見学旅行記を取り上げたい。

一九四一年一月、国立北京女子師範学院の三二人の学生は四人の引率教員とともに約三週間の日本見学旅行に出た。<sup>61</sup>当時、華北の教育機関では、学生や教員たちに日本の文化や「進んだ」技術を知らしめるために、

しきりに日本見学旅行や日本研修を進めていた。<sup>65</sup> 同校の旅行はまさに日本の占領地経営を担当した内閣直屬機関である興亜院が主催したもので、<sup>66</sup> 今も彼女たちの旅の記録が旅行記として残されている。もちろんこの旅行記は日本側、特に興亜院関係者に見せることを前提として書かれたものであり、史料的には十分な注意が払われなければならない。それでもなお、そこには日本側が見せたかった女子教育像が写し出されていると同時に、同校の学生の目を通して見た日本の女子教育の特徴もある程度反映されていると考えていいだろう。本章ではまず同校の女子教育機関への訪問記録を中心として、日中における女子教育のとらえ方の違いの一端を見ていく。

先述したように日本占領下の華北では、多くの学生旅行団が日本に送り込まれていたが、同校の旅行には特に「女子向き」のプログラムが組み込まれていた。旅行中、彼女たちは八校の教育機関を見学しているが、そのうちの半数が女子校であった。ここに男子を対象とした旅行との大きな違いが見受けられる。

彼女たちが教育機関の中で一番初めに訪問したのが、東京家政学院であった。東京家政学院は日本の家政科教育の第一人者である大江スミが一九二五年に創設した学校である。大江はイギリスに留学した経験から、現地の実地訓練を重んじた家政学を日本式に編成し直し、日本の家政学の基礎を作り上げた教育者として知られる。<sup>67</sup> この学校を、日本における学校訪問の最初に持ってきたところに、主催者側の意図が透けて見える。では学生側はこの訪問をどのように受けとめたのだろうか。家政科系三年生のTR<sup>68</sup> は以下のように記している。

東京に着いた三日目に、家政学院を參觀した。(中略) 当校の目的は、学問と技術を持った人材を育成することで、裁縫、料理、洗濯、掃除など種々の技術を細大漏らさず大事にしている。卒業後、社会に

国立北京女子師範学院について

貢献することもできれば、勤儉な主婦となることもできる。裁縫や料理などの技術は学問と無関係だと考える人もいるが、事實は違う。(中略) 日本では女子の家政教育が、とても重視されている。我が国では、これまで天津の河北省立女子師範学院院长である齊璧亭先生<sup>69</sup> が、家政教育を提唱したことがあり、同校に家政科を設けた。その設備は完璧なものであったが、残念なことにはほどなく停止となった。現在、二、三の大学で家政学科はあるが、経済的な理由で、設備が不完全な部分が多く、授業も行き届いていない。日本の家政学院で行われているような授業は、中国にも適しており、増やしていく必要がある。<sup>70</sup>

ここからは、当時中国で「裁縫や料理は学問と無関係だと考える」意見が根強く、家政科教育が提唱されてはいたが、決して重視はされていなかったことが確認できる。第二章で述べた斉国樑の名も見られ、彼が家政科教育に尽力したが、それが頓挫してしまったことも記されている。このようにTRは家政学院のことを詳しく述べているが、実は彼女以外に同校のことを記した学生はいない。残る学生は日本の総合的な印象の中で、家政科教育に部分的に触れているだけである。それだけでなく、旅行を引率した中国人の女性教員は、日本の家政科教育そのものを否定的に捉えていたのではないかと見られる文章を残している。

大抵の日本女性はみな家庭に入らなければならないため、中等以上の学校の科目には、どこも家事科が含まれており、礼儀作法、料理裁縫、染織、掃除、部屋の配置などを習う。女子の大学校を称するところでも、この科目を免れることはできない。よって我が国から遊学してきた女子学生の多くは、風俗習慣が異なるため、このカリキュラムには興味を示さない。(中略) 日本は家庭を主体としており、女性教員に対しても家庭常識の指導に動きを置いていることは、言

うまでもない。日本人の日常生活の点から言うと、見習うべきところがたくさんある。日本の中等家庭ではめったに使用人を雇わず、一切の仕事は主婦が負担している。例えば、部屋のしつらえ、衣服の洗濯、調理の方法、娯楽や貯蓄の計算、客のもてなしなど、すべてに一定のやり方がある。これは一つの家だけでなく、どの家もそうであり、一律に規律化された家庭を作り上げている。(中略)つまり、日本が今日強国となったのは、教育機構が「学んで実際に役立つ」方法を採用しているからであると、高く評価せざるを得ない。<sup>④</sup>

これを書いたのは律影潭という講師で、四人いた引率教員の中で唯一の女性教員であった。彼女の経歴は不明だが、旅行中しばしば学生と間違われている<sup>⑤</sup>ことから、若手の教員であったことは間違いない。律影潭は日本の女子教育が中等、高等教育を問わず家政科教育を重視していること、実践を重視し、主婦自らの手で行うべき家事の細かなノウハウが教育現場で伝授されていることを指摘し、「規律化された家庭を作る」ことこそが、日本の女子教育の目標の一つであると鋭く見抜いている。最終的に日本の女子教育を称賛するような結論を導き出しているが、彼女自身は日本の女子教育を批判的、懐疑的に見ていたであろうことが文の端々から伝わってくる。

従来、近代中国の女子教育は、成立当初より社会で活躍する女性エリートを養成することに期待が寄せられ、ともすれば家政科教育は女性を家庭に閉じ込めようとする遅れた教育であると批判を浴びたことは先に述べた。それには中層以上の家庭では、家事は使用人のするものであり、教育を受けた女性が担うべき役割だという認識が薄かったことも関わっている。<sup>⑥</sup> それに対し日本では、教育の現場においても階層差よりむしろ性別役割分業の方がはつきりと示されていた。同校の旅行記にも、日本の教育に見られる色濃いジェンダー規範を指摘したものがいくつかあ

る。そのうちの一つははつきりとこう述べている。

(私が特に氣を付けた事は)女子教育の専門化と云ふ事です。女子は先天的に男子と異なる爲に、其の本能としての要求も一様でない<sup>⑦</sup>と云ふ建前で、女子に對しては、歐米の共同教育制度を採らずして、男子とは別に其の性情に順應し、その本能に適合した教育を施し、以て女子の天職を遺憾なく果し得るやうに爲すと云ふ方針は、最も賛成すべきものではありますまいか。<sup>⑦</sup>

つまり彼女たちが目にした日本国内の女子教育は、男女別学教育を採用していた臨時政府の方針と比べてもなお、明白にジェンダー規範を前面に打ち出していたことが見て取れる。このような中で、家事は女性自らがすべき仕事であると位置づけられ、中等、高等教育の現場でもその方針が徹底されていた。北京から来た学生たちは、学校の中においてすら「家事」の類を使用人に頼らない日本の女子学生の姿勢を、「勤労」「勤勉」「勤儉」という表現を使って褒め称えている。

特に日本国内に於ける學生に見られる勤勞愛好の精神こそ、私をして最も敬服に値ひすべきものと感せさせました。彼等は勞作を以つて一種の美德として神聖視し、學業に専心奮勵する外に、肉體上の勞をも自分等の天職として厭つて居りません。それは、學校内に於ける掃除がよく出來てゐること、進んでそれを擔當してをることではいけません。或日、大阪の或學校の前を通つた時、大勢の生徒が、帚を手に握つて、お掃除をしてをる様子を見て、中國女性といふ立場から、ほんとに涙ぐましく感じました。その他、學校によれば、生徒が全校の炊事を擔當し、宿舍の清潔整理も各々分擔してをると聞きました。勞作更にスポーツの訓練によつて學生一同みんな健壯な體格と潑瀾とした精神を築<sup>⑧</sup>げ上げてゐることは疑ひないところでせう。

学生自らが掃除をするという日本の学校の光景は、彼女たちには「涙ぐましく」感じられるほど珍しいものであったことが分かる。またこれを書いたTRは、「勤勞」精神を称賛するだけでなく、家事労働をすることにより、身体も鍛えられるという論を展開している。家政と体育は一見すると、性質の異なる教育であるかのように見えるが、近代国家に貢献する女性の育成という点では共通しており、彼女の中でも同一のロジックでとらえられていたことが分かる。これはまた、国立北京女子師範学院で家政科教育と体育教育に特に力が入れられていたことも思い起こさせる。家庭における貢献と健康な身体というのは、戦時下の両国でもともに女性に求められた資質でもあった。

以上、彼女たちの日本の女子教育に対する印象をまとめてみると、一つ目には家政科教育に代表される男女の性別役割分業がはっきりしていたこと、二つ目には理論よりもすぐに役立つ実践が重んじられていたこと、三つ目には使用人を置かず、女性自らが家事をする勤勞の精神が貫かれていたこと、という三つの特徴が挙げられる。当時、中国でも国民政府の「母性教育」などの影響により、家政科は復活していたが、それでも彼女たちの目には、女性に家庭内役割を求めようとする日本の女子教育の方針が、より強く印象づけられたことは明らかである。彼女たちはいづれも、日本の素晴らしさを見せるといって主権者側の意図を酌んで、日本の女子教育を称賛する言葉を並べている。確かに教育現場で家事の技術の一つ一つ丁寧に伝える実践重視の教育方針が、ある意味で新鮮に映ったという可能性も否定できない。だが高等教育を受け、エリート卵を自認する女子学生たちが、そのまま家庭生活に直結する日本の女子教育を、自分たちの目標としたのかについては疑問が残る。

#### 【第四章 働く女性への眼差し】

前章では日本の女子教育機関を訪問した同校の学生のとらえ方を中心に見てきた。だが実は日本の良妻賢母育成型の女子教育方針に興味を示したのは、家政科の学生など、ごくわずかな人数に限られていた。彼女たちの多くは、むしろ日本の至るところに見られた働く社会人女性に関心を寄せていた。旅行記には一九四一年当初の日本社会が北京の学生の目を通して、鮮やかに描き出されているが、中でも働く日本女性についての描写がひときわ多く、精彩を放っている。

体育専修科LFが書いた旅行記のタイトルはまさに、「職業婦人を中心として」であった。

女性は溫柔にして和霽、安靜にして典雅職業婦人が多い。彼等はかひがひしく各商店、食堂、旅館、各交通會社、電車車掌バス案内係り等として働いてゐる。女性治内の功は實に世界女性の牛耳であることを、目のあたりに見、實に羨しく感じた。<sup>70</sup>

彼女の目には行く先々で「かひがひしく」働く社会人女性が映り、「羨ましく」感じていたことが分かる。文科で日本語を学ぶYZは「日本女性の活動」と題し、もう少し具体的に記している。

私が旅行中つねに感心致しましたのは、日本の婦人に對し色々な職業が開放せられてゐることで御座いました。例へば、各商店に行くとき、すぐ優しい女店員が澤山見られます。又、電車やバスの中では、やはり女が切符を賣つてをり、遊覽バスでは、いゝ聲で經過する處を詳しく説明してくれます。目に入る女事務員達は皆一生懸命に働いてゐます。この日本婦人の勤勉といふことは、私どもの感じた點で御座います。日本の富強の一つの原因は、このやうな婦人のよく

働く點ではないかと考へました。<sup>83)</sup>

L FとY Zはそれぞれ日本の女性の職業として、店員、仲居、車掌、バスガイド、会社や役所における事務職員などを挙げている。実はこの日本の女性たちの社会進出は、戦時下における比較的急激な変化でもあった。当時、日本はまだ太平洋戦争には突入していなかったが、それでも長引く日中戦争の戦線に多くの成人男性が動員されており、政府は未婚女性を対象とした労務動員を強化し始めたところであった。<sup>84)</sup>つまり戦時の労働力不足を背景に、日本社会でも女性に国家のために家の外に出て働くことを急速に奨励するようになっていたのである。

一方、一九四一年当時の北京でも、決してむやみに女性を家に閉じ込めようとしていたわけではない。むしろ雑誌には社会で働く女性たちの姿がひんばんに紹介され、日本と同様に戦時体制の下で女性も社会に貢献することが求められていた。<sup>85)</sup>だがそれでも、特に北京を中心とする北方では、中等以上の教育を受けた女性の職業は、教員など依然狭い範囲に限られていたのが現状であったのだろう。彼女たちにとって、多少なりとも教養を活かすことのできる職場は魅力的に映ったようだ。

彼女たちの旅行記の中には、日本女性の家庭における働きと、社会における働きの両方に言及したものも複数ある。

私が最も感じた點は、日本の女性がよく働くといふことでございまして。家庭に於ても、社會に於ても、皆骨折つて働いて居り、特に子女の教育については一生懸命に努力して居ります。一口にいへば、日本の女性は實に國家の爲めに出来るだけの努力を惜しんでゐないことが判ります。<sup>86)</sup>

一般の女子が勤儉にしてあらゆる勞苦に耐へる精神には、心から非常に感心させられました。學校の課業、或は職業の勞作をした後、自分の家へ歸つてから又一切の家政を一手にひきうけてやる者もあ

ると聞きました。<sup>87)</sup>

上の二例ではいずれも、家庭における「良妻賢母」像と社会における「職業婦人」像が、国家のために力を惜しまず働くという共通項の下で、違和なくつなぎ合わされている。当時の日本では家事、育児をすべてこなし、その上で社会でも活躍する女性が、近代国家に必要な女性として、矛盾なく期待されていたことが見て取れる。

しかし環境の整えられていない当時の社会の中で、実際に両者の役割を完璧に追求することは難しく、女性は家庭のことをこなしただで、余力があれば社会に出て働くという形を取らざるを得なかった。また旅行が行われた一九四一年初めの段階では、日本の労働力不足もさほど深刻化はしておらず、労働力として動員を強化されたのは未婚の女性に限られていた。<sup>88)</sup>つまり当時の日本では、決して女性が男性と対等の立場で社会進出していたわけではなく、社会において男性と競合しないところで補足的な力を発揮することが期待されていたに過ぎなかった。彼女たちは戦時の労働力不足を補うため、国家に都合良く動員されていたとも言えよう。

ただこうした戦時動員が結果的に女性の社会での相対的な地位向上につながっていったのも事実である。そしてその社会で働く女性姿が、国立北京女子師範学院の学生たちにも、理想のあるべき女性像として映ったのであろう。彼女たちは旅行の主催者である興亜院が見せたかった日本の良妻賢母育成型の女子教育にはさほど関心を示さず、日本社会の様々な場所で働いていた社会人女性に目を向けた。占領下の北京で臨時政府による男女別学の高等教育を受けた彼女たちではあったが、それでも目指そうとしていたのは、やはり家の切り盛りに長けた「良妻賢母」ではなく、社会で活躍する「職業婦人」であったことが分かる。

## 【おわりに】

国立北京女子師範学院は臨時政府が教育を「回復」するという名目で作った女子の高等教育機関であった。同校は日本の他の植民地や占領地における教育と同じく、日本語や日本文化を学ばせる科目を必修科目としただけでなく、規律や実践を重んじることに教育の力を置いていた。さらに同校では、性別役割分業を前提とした家政科教育を特に重視していた。だがこの家政科の内容を検証してみると、必ずしも日本の家政学をモデルとしたものではなく、国民政府の下で行われてきた「母性教育」の流れを引き継ぐものであったことが分かる。女性の家庭内役割を重視した「母性教育」は、男女別学教育を進めようとした臨時政府にとっても受け入れやすい教育方針であり、それが都合よく利用されたと考えられる。

だが同校の学生は決して家庭回帰を望んでいたわけではなかった。それは興亜院主催の日本見学旅行において、日本側が提示しようとした良妻賢母育成型の女子教育に学生たちの関心がさほど集まらなかったことから見て取れる。彼女たちの目に映った一九四一年当初の日本は、階層規範にも増してジェンダー規範が濃厚な社会であったが、戦時下の労働力不足を背景に、社会で働く女性たちが顕彰され始めた時期でもあった。同校の学生たちはそのような日本の「職業婦人」に注目し、あるべき理想の姿としてとらえたのであった。中国の近代女子教育は成立当初より女性の社会での役割を期待する傾向が強く、家庭内の細々とした家事は教育を受けた女性がすべきことではないという考えも存在していた。ましてや高等教育機関においてはなおさらのことであった。将来の社会や国家を担うエリート卵を自認する国立北京女子師範学院の学生たちにとって、女性の家庭内役割を強調しようとした日本の女子教育は、

物足りなく感じられたであろうことは想像に難くない。

ただ国立北京女子師範学院で学んだ学生自身の声を示す資料は、本稿で使用した旅行記を除くとごくわずかであり、彼女たちの困難を極めたであろうその後の歩みも、戦時中の一部を除いてはほとんどたどれていない。<sup>77)</sup> 今後、さらに検証していく必要があるだろう。

## 注

- ① 一九四〇年、南京に汪兆銘政権ができると臨時政府は華北政務委員会と改称された。だが政治機構はそのまま引き継がれたため、本稿では呼称による混乱を避けるため、四〇年以降もそのまま臨時政府とした。
- ② 小野美里「日中戦争期華北占領地における日本人教員派遣―顧問制度との関連に注目して―」首都大学東京『人文学報』第四三〇号、歴史学編第三八号、二〇一〇年三月など。
- ③ 駒込武「日中戦争期文部省と興亜院の日本語教育政策構想―その組織と事業―」『東京大学教育学部紀要』第二九卷、一九九〇年三月。
- ④ 例えば北京師範大学のHPを見ると、日本の占領期間中に臨時政府によって再編された学校は校史沿革の中に組み込まれていない。北京師範大学校史沿革 <https://www.bnu.edu.cn/xxsk/ksyq/index.htm> 最終閲覧、二〇一九年十一月二十四日。
- ⑤ 山本一生「日本占領下北京大学における日本留学経験者の役割―錢稻孫と周作人を中心に―」『上田女子短期大学紀要』第四十一号、二〇一八年一月。
- ⑥ 宋恩榮、余子侠『日本侵華教育全史』第二卷華北卷、人民教育出版社、二〇〇五年（宋恩榮、余子侠主編、木村淳訳『日本の中国侵略植民地教育史』第二卷、華北編、明石書店、二〇一六年として邦訳も出されている）。余子侠「日偽統治下华北沦陷区的高等教育」『近代史研究』二〇〇六・六、总第一五六期、二〇〇六年十一月。王士花「华北沦陷区教育概述」『抗日战争研究』二〇〇四―三、二〇〇四年、孙邦华「日伪政权统治下北京师范大学的奴化教育论析」『北京社会科学』二〇一七年第八期など。
- ⑦ 前掲「日中戦争期文部省と興亜院の日本語教育政策構想―その組織と事

- 業―、駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、一九九六年、前掲「日中戦争期華北占領地における日本人教員派遣―顧問制度との関連に注目して」、小野美里「事変」下の華北占領地支配―教育行政及び第三国系教育機関との相克をてがかりに―『史学雑誌』第一二四編第三号、二〇一五年三月など。
- ⑧ 新保敦子『日本占領下の中国ムスリム―華北および蒙疆における民族政策と女子教育』早稲田大学出版部、二〇一八年。
- ⑨ 前掲「日本占領下北京大学における日本留学経験者の役割―銭稻孫と周作人を中心に―」四二頁。
- ⑩ 『日本侵华教育全史』第二卷华北卷、二七四―二七五頁。なお臨時政府の下で再編された学校は、中国の研究では国民党支配地区に移転した「正統」の学校と区別するため、「偽」の文字が付け加えられたり、括弧が付けられたりしていることが多い。
- ⑪ もともと北京女子師範大学から分裂し、反楊陰楡校長派の運動に批判的なグループが作った「女子大学」に由来するが、後に反楊陰楡の側に立った教員たちも教鞭を執った。周作人「女子學院」『知堂回想録』下冊、三育圖書文具公司、一九七一年再版、五三五―五三八頁。
- ⑫ 在北京大日本大使館文化課「北支に於ける文化の現状」新民印書館、一九四三年八月、四四頁（『中国近現代教育文献資料集』IV日本占領下の中国教育 第八卷）日本図書センター、二〇〇五年所収。
- ⑬ 「本院行政誌要」本院秘書處『國立北京女子師範學院概覽』（以下、『概覽』と省略する）慈成印刷工廠、中華民國二十九（一九四〇）年四月出版〔非売品〕、一・二頁。
- ⑭ 金斑実「九州帝國大學に學んだ留學生―工學部を中心に―」『九州大學留學生センター紀要』第二四号、二〇一六年二月、二頁。
- ⑮ 「本院行政誌要」『概覽』一・三頁。
- ⑯ 「國立北京女子師範學院招（考新 集舊）生啓事」『新民報』一九三八年三月一日第四版。
- ⑰ 「本院組織大綱」『概覽』八頁。
- ⑱ 彭程「『新民主主義』に対する批判的考察―『新民主主義』という講演を中心に―」『鶴山論叢』第十号、二〇一〇年三月など。
- ⑲ 「學校教育要綱」（一九三七年公布）『滿洲年鑑五（昭和十四年版）』日本図書センター復刻版、一九九九年、三三二頁。
- ⑳ 前掲「日偽政权統治下北京师范大学的奴化教育论析」四二・四三頁。
- ㉑ 同右、四五頁。なおこの引用は国立北京師範學院の「東亜史論」に関するものであるが、国立北京女子師範學院もほぼ同様の教育であったと推測される。
- ㉒ 「各科系課程」『概覽』五〇―八四頁。
- ㉓ 上海の商務印書館から出された著名な『婦女雜誌』とは異なる。この『婦女雜誌』については、羽田朝子「『婦女雜誌』にみえる梅娘の女性観―近代的主婦像と『国民の母』」『現代中国』九二号、二〇一八年九月に詳しい。なお本稿における『婦女雜誌』はすべて華北文化書局の『婦女雜誌』を指し、線装書局による『中國近現代女性期刊匯編』影印版、二〇〇八年を使用した。
- ㉔ 本社「國立北京女子師範學院訪問記」『婦女雜誌』第一卷第二期、一九四〇年一〇月。
- ㉕ 「青空を截る」第一書房『北支』七月號（第二号）、一九三九年七月、二一・二二頁。新保前掲書二〇七頁は、体育で身体を鍛え、献身的に日本のために働く女性像が、メディアによって作り上げられていったことも指摘している。
- ㉖ 新保前掲書、二〇四―二〇八頁。
- ㉗ 「訪問記」七四頁。
- ㉘ 「國立女子師範學院校舍」『華北交通アーカイブ』（華北交通アーカイブ作成委員会）<http://codh.rois.ac.jp/north-china-railway/> 原板番号一六二七七。
- ㉙ 齊宣「由女子教育立場討論女師學院的廢存問題」『婦女雜誌』第三卷第一期、一九四二年一月、二九頁。
- ㉚ 「女師學院整頓校規 改定入學須知」『新民報』一九四〇年九月一日第三版。
- ㉛ 「本院行政誌要」『概覽』一・二頁。
- ㉜ 前掲「日偽政权統治下北京师范大学的奴化教育论析」四六・四七頁。
- ㉝ 前掲「事変」下の華北占領地支配―教育行政及び第三国系教育機関と

- の相克をてがかりに―」、五四頁。
- ③4 ただし条件がついており、成績の平均が乙評価に達しない場合は、公費を打ち切られた。
- ③5 「公費生學額規則」「獎學金規則」「概覽」二〇、二二頁。
- ③6 ただし臨時政府関係者の子女がそのまま入っていた可能性も否定できない。戦時中、同校の附属校として作られた女子中学に通っていた女性は、「私たちのクラスには、裏口入学で入った学生がたくさんいた。彼女たちは十七、八歳で、勉強せず、試験ではカンニングをしていた。」と振り返っている。刘秀莹「我的母校师大女附中」『记忆』二〇一四年六月三日、第一一五期、四三頁。
- ③7 前掲「北支に於ける文化の現状」四四頁。
- ③8 前掲「由女子教育立場討論女師學院的廢存問題」。
- ③9 「國立女師學院組織規定公布」『新民報』一九三八年三月一日第四版。
- ④0 「訪問記」七四頁。
- ④1 「各科系課程」「概覽」五〇〜八四頁。
- ④2 「訪問記」七三頁。
- ④3 山本禮子「植民地台湾の高等女学校研究」多賀出版、一九九九年、一二八〜一三〇頁。
- ④4 小林善帆「植民地台湾の女学校といけ花・茶の湯」『藝能史研究』第一八九号、二〇一〇年四月。
- ④5 「家事實習室設備」「概覽」八七頁。
- ④6 良妻賢母については、小山静子「良妻賢母という規範」勁草書房、一九九一年、陳延媛『東アジアの良妻賢母論―創られた伝統』勁草書房、二〇〇六年などを参照。
- ④7 白水紀子「中国における「近代家族」の形成―女性の国民化と二重役割の歴史―」『横濱国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ』人文科学、第六集、二〇〇四年二月。
- ④8 拙稿「一九二〇年代中国における家事科教育―女性と家庭とをめぐって―」『立命館史學』第二二号、二〇〇〇年十一月。
- ④9 「中華民国教育宗旨及其實施方針」多賀秋五郎編『近代中国教育史資料』民国編中（日本學術振興會發行、一九七四年）一三三六頁。
- ⑤0 杨健美「从妇女解放运动的发展看我国二〇世纪上半叶高校的家政教育」『中国人民大学教育學刊』第三期、二〇一三年九月。
- ⑤1 姚瑤、章梅芳、刘兵「民国时期高校女子家政教育与烹饪技术的科学化改造」『科学教育与博物馆』二〇一六、二、二〇一六年三月、一九二頁。なおこの十四校に国立北京女子師範學院は含まれていない。
- ⑤2 戴建兵、张志永「抗战时期西北家政教育」『文史精华』二〇一二・增刊二、二〇一二年。
- ⑤3 李海阳「女子师范教育家齐璧亭」『多音』二〇一四年七期、三八・三九頁。
- ⑤4 「本院沿革」河北省立女子師範學院本部『河北省立女子師範學院一覽』義利印刷材料局、民国二三（一九三四）年。
- ⑤5 戴建兵、张志永、戴宇龙「齐国樑与中国北方师范教育」『丝绸之路』二〇一四年二〇期、三〇頁。
- ⑤6 前掲「女子师范教育家齐璧亭」三九・四〇頁。
- ⑤7 「教職員録」「概覽」九九・一一〇頁。戎は後述する日本見學旅行を引率した教員のうちの一人。
- ⑤8 「教員一覽」四頁『河北省立女子師範學院一覽』。
- ⑤9 「教職員録」「概覽」一〇三頁。
- ⑥0 一九三四年の河北省立女子師範學院家政学系第二学年の在籍学生名簿にその名が見られる。「學生姓名一覽」二二頁『河北省立女子師範學院一覽』。
- ⑥1 前掲『河北省立女子師範學院一覽』一一一・一二二・一三八・一三九頁。
- ⑥2 前掲「民国时期高校女子家政教育与烹饪技术的科学化改造」一九三頁。
- ⑥3 前掲「从妇女解放运动的发展看我国二〇世纪上半叶高校的家政教育」。
- ⑥4 同校の日本旅行については、拙稿「浅析沦陷时期北平女学生的赴日参观旅行―以伪国立北京女子师范学院的「赴日印象记」为考察对象」『第五届中国近现代社会文化史国际学术研讨会论文集』社会科学文献出版社で紹介する予定である（未刊行）。
- ⑥5 『日本侵华教育全史』第二卷华北卷、四七〇・四七一頁。
- ⑥6 ほぼ同時期に数校の学生旅行団が日本に送り込まれている。『新民報』一九四一年一月二二日、一月二四日。

- ⑥7 国立北京女子師範學院赴日見學團專刊編輯部『憧憬日本―赴日印象記』(以下、『印象記』と省略)、新民印書局、非売品、一九四一年六月。この書は立命館大学名誉教授の笈文生先生にご提供いただいた。ここに謝意を表したい。
- ⑥8 参観した教育機関を順に並べる。東京家政学院(現、東京家政学院大学)、日本体育会体操学校(現、日本体育大学)、東京音楽学校(現、東京芸術大学音楽学部)、東京女子高等師範学校(現、お茶の水女子大学)、東京聾啞学校(現、筑波大学附属視覚特別支援学校、同聴覚特別支援学校)、東京帝国大学(現、東京大学)、東京府女子師範学校(現、東京学芸大学)、奈良女子高等師範学校(現、奈良女子大学)。「赴日参観日程」『印象記』(頁数記載なし)。
- ⑥9 関口敏美「大江スミにおける家政教育論の形成と展開」『奈良女子大学文学部教育文化情報学講座年報』第三号、一九九九年。  
一方、斉国樑はアメリカに留学している。アメリカ家政学はイギリスの実地重視の方式に比べると、学理重視であったとされ(関口、六四頁)、この違いが両校の家政科教育方針にも反映された可能性がある。
- ⑦0 戦後、中国では占領下の学校で教育を受けた経歴を隠さねばならない歴史が続いた。そのため本稿では教員名は記したが、学生の名はイニシャルで表記した。
- ⑦1 斉国樑のこと。壁亭は字。
- ⑦2 家事三TR「東京家政学院」『印象記』二二・二三頁。(原文は中国語)
- ⑦3 当時、日本で女子大学の名称は使われていたが、学制上では女子大学は認められていなかった。
- ⑦4 講師律影潭「赴日後的感懐」『印象記』三・四頁。(原文は中国語)
- ⑦5 「赴日見學團追想座談會」『印象記』七三頁。
- ⑦6 拙稿「中国近代における家事科教育」関西中国女性史研究会編『ジェンダーからみた中国の家と女』東方書店、二〇〇四年。
- ⑦7 日文三DR「旅行中五つの感想」『印象記』四七頁。
- ⑦8 家事三TR「諸學校と學生」『印象記』一七・一八頁。
- ⑦9 體育二LF「職業婦人を中心として」『印象記』四四頁。
- ⑧0 日文三YZ「日本女性の活動」『印象記』四三頁。
- ⑧1 奥健太郎「戦時下日本の労働員と政府宣伝」『写真週報』に描かれた女性労働―慶應義塾大学法学研究会『法学研究』八二巻二号、二〇〇九年二月、三三八頁。
- ⑧2 前掲「『婦女雜誌』にみえる梅娘の女性観―近代的主婦像と「国民の母」、菊地俊介「日本占領下華北における新民会の女性政策」『現代中国研究』第三二号、二〇一三年三月など。
- ⑧3 日文三WN「日本とところどころ」『印象記』三〇頁。
- ⑧4 日文三ZE「日華習性の違ひ」『印象記』四〇頁。
- ⑧5 前掲「戦時下日本の労働員と政府宣伝」『写真週報』に描かれた女性労働―三三八頁。
- ⑧6 むろん物足りないだけでなく、日本の占領そのものに対する反発や抵抗もあったであろうが、本稿では主に臨時政府側、及び日本側からの資料しか検討できなかったため、この側面については稿を改めて述べたい。
- ⑧7 日本占領下で出された女性雑誌の中には、同校の学生や卒業生が寄稿した文章も散見され、そこから彼女たちの戦時中の主張や歩みは一部確認できる。  
(本学文学部非常勤講師)